

～生活の舞台～ 第12回目 特設ステージ

普段は入所者様の日常生活の場である空間。私たちが「ホール」と呼んでいるこの空間ですが、季節毎のイベントの際には即席のイベント会場としても利用されています。

そんなホールに、突如として現れたステージ。

実はこれ、簡易式の「特設」ステージなのです。特に大きな催しの際にのみ組み立てて、外部の方を呼んでミニコンサートを行ったり、スタッフによる歌や芸を披露したり。過去には、猿まわし芸人の方を呼んだこともありましたが、特設とはいえ、立てばなかなかの高さ。「ステージに立っているんだ!!」という実感が湧きます(笑)。

去る敬老の日。『華の会』のお二方をお招きし、美しい三味線の演奏と歌を披露していただきました。懐かしい浪曲の数々に、入所者様も一緒に唄ったり、中には踊られる方も居たり。とても楽しくて思い出に残る敬老会となりました。



敬老の日とは、多年にわたり社会に尽くしてきた老人を敬い、その長寿を祝うための国民の祝日です。現在は〈毎年9月第3月曜日〉と法律で定められています。元々は、9月15日を「としよりの日」とし、その後「敬老の日」として国民の祝日に加えられました。さらに平成15年「ハッピーマンデー制度」の導入により現在の形に変更されました。



皆さん一緒に唄ってます♪

ふたばよもやま話 (第四十四回) ～関門鉄道トンネル～

北九州あるいはその周辺に住む人にとって“関門”とは、とても馴染みのある2文字ではないだろうか？

関門とは、今更だが下関の“関”と門司の“門”のことである。が、大きな意味では北九州と山口県西部を含み、現在では関門海峡を挟んで福岡県はもとより九州においても福岡都市圏に次ぐ大きな経済圏を形成している。

関門都市圏が発展した背景には、関門鉄道トンネルの完成が無くてはならない要素であったことは間違いない。1 kmにも満たない海峡を陸路でつなぐ構想は明治時代からあり、当初は橋梁案が検討されたが、敵国からの攻撃では絶対的の不利とされ、軍部の強い反対からトンネル案が採用された。そしてここに世界初の海底トンネルが造られたわけであるが、普通工法の他、陸上部では予めトンネルとなる箱を造って沈める「潜函工法」が、海底部では現在トンネル掘削工事の主流となっている「シールド工法」が採用され、まさに当時にとっての最先端技術を駆使し、戦時中に開通した。

戦時物資輸送を主眼に計画されたトンネルだったが、戦後の復興にも大きく役立ち、現在の繁栄の基となったのである。

① 普段なかなか目にすることができない関門鉄道トンネルの内部。手前がトンネルのパーツを予め造って埋める潜函工法、奥は円筒形の型枠の中で掘り進めるシールド工法である。



↑ JR小森江駅構内には、本坑に先立って掘られる調査坑の施設跡が残っている。

⇨ 戦前の日本は、世界の趨勢もあり、インフラ整備等は国防最優先であった。写真は工事中のトンネルを視察する東条英機。



3人の合計、なんと299歳(!)

ご夫婦で仲良く

仲良く100歳コンビ



〈お詫び〉紙面の都合で、9月誕生日のお祝いの写真は来月号で一緒に紹介させていただきます。

今月の予定 (10月)

石橋胃腸内科医院 回診 (毎月曜日)

5日、19日、26日

ますゆき皮膚科クリニック 回診
1日(木)

小倉南歯科医院 回診 (毎火・木曜日)

6日、8日、13日、15日、20日、
22日、27日、29日

ビューティヘルパー (訪問理美容)
21日(水)

入所者様インフルエンザ予防接種
5日(月)

【編集雑記】▼利用者様の若い時代、一番印象に残っている首相は、やはり東条英機ではないだろうか。世界が話し合いではなく武力による解決方法しかなかった時代、日本の舵取り役を任せられた東条は、ある意味悲劇的な宰相だったのかもしれない。彼に対する評価は論じないにしても、先の大戦の折の渦中の人物であったことは間違いない▼「戦争が好きで軍国主義者」というイメージが強いが、彼には意外な一面もある。一人で街に出てゴミ箱を見て回っていたのは、有名な話である。庶民がどんな生活をしているのか、ゴミ箱を調査すると一目瞭然である、というわけだ。またこの時代、軍の高官ともなれば愛人の一人や二人いるのは普通だった時代に、東条は一人の愛人も持たずに妻だけを愛していたという▼東条夫人は田川郡のある地方から嫁いでいる。軍の装備や兵士の迅速な輸送に鉄道は欠かせないもので、戦前は鉄道整備が最優先事項であった。関門トンネルも、本州と九州をつなぐ大動脈として計画され、コラムの写真的ように東条自身も工事の進み具合をいつも気にして、自ら視察にも訪れている。愛妻家の東条は、関門トンネルの開通により「勤務地の東京と妻の実家のある九州が陸続きになって列車で行き来できる」ということを意識し、早期の完成を心待ちにしていたのではないだろうか▼アメリカ軍は本土決戦の際、関門トンネルを使って日本軍の応援部隊が駆けつけることを危惧し、関門トンネルの破壊を試みたが、幸い破壊されずにすんだ▼戦後の食糧難の時代、利用者様は買い出し等で、きつとトンネルを利用したことだろう。今の自分たちと違った関門トンネルの思い出は色々あるはずだと思う▼平和な時代を生きている我々は、関門トンネルの歴史をいま一度振り返り、困難の時代を生き抜いてきた利用者様に感謝すべきだ、と考える。